

—ナチス時代のハルビン・神戸・上海—

日本はなぜユダヤ人を
迫害しなかったのか

ハインツ・E・マウル 著

黒川 剛 訳

芙蓉書房出版



著者 **ハインツ・エーバーハルト・マウル**

1937年ドイツ生まれ。元ドイツ連邦軍空軍将校。連邦空軍参謀大学終了後、防衛庁防衛研究所への留学を経て在日ドイツ大使館付武官として勤務。1992年に退役。現在はフリーランス・ジャーナリストとして日本、アジア、中東を重点に執筆活動を行っている。その間ボン大学で日本現代政治史を研究し、論文「日本とイスラエル国家の関係」で修士号を取得。さらに、本書の底本となった論文「ナチズムの時代における日本帝国のユダヤ政策」により哲学博士号取得。ドイツ語のほか、英語・フランス語・日本語にも堪能。著書に「軍事国家日本？—安全保障政策と自衛隊」がある。

訳者 **黒川 剛** (くろかわ つよし)

1932年生まれ。東京大学教養学科、ハンブルグ大学史学科を経て外務省入省。駐クウェート大使、駐オーストリア大使、中央大学総合政策学部教授などを歴任。現在、(財)日独協会理事。共著書に「オーストリア・統合—その夢と現実」「日本論」、訳書に「東欧の影」「ヒトラー伝」などがある。

—ナチス時代のハルビン・神戸・上海—
日本はなぜユダヤ人を
迫害しなかったのか

ハインツ・E・マウル 著

黒川 剛 訳

芙蓉書房出版

マウル

〔将校。
2所への留学を経て

—ナリストとして
っている。

士号を取得。
ムの時代における
号取得。
語にも堪能。
自衛隊」がある。

ング大学史学科を
—ストリア大使、
、(財)日独協会理事。
実「日本論」、
る。

マウル

将校。
所への留学を経て

ーナリストとして
っている。

士号を取得。
の時代における
号取得。
育にも果能。
「衛隊」がある。

グ大学史学科を
ストリア大使、
、(財)日独協会理事。
夫「日本論」、
。

日本語版への序文

ユダヤ人大量虐殺（ホロコースト）の人間的・運命的な諸問題については詳細な研究があるし、このヨーロッパの悲劇の歴史的な意味合いについても、学術的に幅広い考察が進められてきた。ドイツ人にとって、ホロコーストはいまだに自らの肉にささった棘^{トゲ}である。他方日本では、自国にかかわりのあるユダヤ人とその運命への歴史的な関心はあまり強かったとはいえない。ヒトラーが責めをおうべきユダヤ人の運命のうち、日本にかかわる部分には、ドイツでも日本でもこれまでほとんど目が向けられてこなかった。それは、日本に強制収容所がなく、ガス室も作られなかったからだろうか。ナチスの支配したヨーロッパとはちがって、日本には何百万のユダヤ人の犠牲者もうまれなかったし、日本はホロコースト問題で次代の人々の良心をうずかせることもなかった。

ドイツをナチスのテロリズムが支配していたころ、ヨーロッパのユダヤ人に残されたただ一つの避難先は極東であった。このユダヤ人たちの運命をめぐる歴史の絡み合いについては、ドイツでも日本でも、この時代に関心をもつ人々ばかりでなく歴史家ですら十分な知識をもっているとはいえない。こうした隙間をすこしでも埋めようというのが本書の狙いである。大日本

帝国は、ともかくにも何年かにわたってヒトラー・ドイツの同盟国であり、ベルリン・東京
枢軸と呼ばれていただけに、当時の日本をみる目は時として厳しいものがある。しかし、日本
の政治と軍の指導部はドイツの人種主義的な迫害妄想に同調したわけではなく、全体としてみ
れば、ユダヤ人を絶滅から救ったともいえることを指摘したい。

一九三八年の上海。ドイツとオーストリアからのユダヤ難民の第一陣が、この町にたどりつ
く。上海こそは、ユダヤ人をナチスの迫害から守ってくれる世界でただ一つの都会だったのだ。
日本は前年の七月から中国と戦争状態にある。日本の占領軍は広大なシナ大陸の東岸を制圧し
ていた。ソ連に接する北辺では、日本の「傀儡国家」満洲が防壁となっていた。日本の同盟国
であるドイツは、ユダヤ難民を日本の庭先ともいうべき極東に放逐していたが、大日本帝国の
ほうは、これにたいする準備がまったく出来ていなかった。日本政府はいわば計画も目標もな
いままに、予期もせぬユダヤ難民の問題に対処しなければならなかったのである。

アジアの広大な地域に覇をとなえていた日本にとって、戦火のせまるヨーロッパからのユダ
ヤ人の大量脱出は、ドイツとの同盟政策からんで爆発物をかかえこむことを意味していた。
パートナーとの緊密な連携を見せかけだけでも保つうえで、ナチス・ドイツとの建設的な協力
が必要だった。そのうえ、アジアに置かれていた国家社会主義ドイツ労働党（ナチ党）の出身
機関や国家秘密警察ゲシュタポの手先どもが、日本にたいして、ドイツと同様の人種主義的な
狂信と残虐さを発揮して極東のユダヤ人の息の根をとめるよう圧力をかけてきたのである。
日本は抵抗した。ナチスの政治的な人種戦争や民族主義闘争の実行に一役買おうとはしな

った。日本にとって、ユダヤ難民の受け入れを拒否するばかりでなく、ユダヤ人を選別し、追
放し、強制収容所におしこめ、そして虐殺することなど、容易な業だったのではなかったか。
しかし日本はこうしたことを一切おこなわなかった。そして何万というユダヤ人を破滅から救
ったのだ。日本はなぜこのように行動したのだろうか。

ナチス・ドイツのようにユダヤ人を完全に排斥することは、人種平等という日本の精神にそ
むくものだった。また、日米関係とのからみでの金融・経済政策的考慮も少なからぬ役割を演
じた。かくて日本政府は、ユダヤ人問題にたいして日本独特の政策で応じたのである。日本の
支配地域にいるユダヤ人は、厳しい入国・通過規則が適用されたものの、基本的にはその
他の外国人と同様の扱いをうけた。満洲国のハルビンでの樋口季一郎将軍や、リトアニアのカ
ウナスでの杉原千畝副領事がしめたようなヒューマニズムは、ナチス・ドイツにくらべて穏
健な日本のユダヤ政策の代表的な例である。

日本にとってユダヤという現実とは、そもそも、日本の歴史の社会文化的・社会政治的遺産の
枠外にあるものだった。ヨーロッパからの難民がおしよせてきたために日本がユダヤ人と直接
触れあうことになったのは、歴史的奇観ともいえるべきことだったのだ。反ユダヤ主義という現
象が知られていなかったわけではないが、日本の一般民衆には無縁のはなしだった。社会はこ
の問題に関心をもたなかったし、ほとんどの政治家や軍人にとって、ユダヤ人やその運命は謎
めいたものだったのである。日本国内にユダヤ人がいなかったこともあり、安江仙弘陸軍大佐
や犬塚惟重海軍大佐のような数少ない日本のユダヤ問題専門家は、ユダヤについての知識を国

アウル

学校。
への留学を経て
ナリストとして
ている。

号を取得。
の時代における
取得。
にも軍能。
衛隊」がある。

グ大学史学科を
ストリア大使、
(財)日独協会理事。
『日本論』、

アウル

等校。
への留学を経て

ナリストとして
ている。

号を取得。
の時代における
取得。
にも果能。
衛隊」がある。

グ大学史学科を
ストリア大使、
(財)日独協会理事、
「日本論」、

「日本」と今時の
一般の
ほうに
い

外から借りてくるほかなかった。基本的なところで外国に依存していたため、ユダヤとユダヤ人について自立した判断をくだすことは困難だった。

「シオンの賢者の議定書」に根をもつユダヤ人の世界支配の陰謀という信じがたい観念や、一方において、世界の支配者たるユダヤ人からの脅威と危険におびえ、他方で、ホロコーストの犠牲者たるユダヤ人の限らない苦難を悼むという具合に、日本人は今日までユダヤ人にたいして分裂した態度をとってきた。

西洋の人種主義は他をおとしめることで成り立つが、極東の人種思想は日本を高めることで成り立つ。ドイツは独裁者ヒトラーに盲従し、日本はひたすら天皇を崇敬した。日本のユダヤ政策には、権力や嫉妬あるいは人間憎悪にもとづく原初的な反ユダヤ性はふくまれていない。

だから過激化や破壊欲と結びつくことはなかった。ユダヤ人と日本との出会いはヨーロッパのユダヤ人の運命の一端をなしており、日独関係の歴史から消し去ることのできない一章である。

当時の日本は、一方においてユダヤ人を利用することを考えながら、他方でユダヤ人の脅威といわれるものを恐れていた。そのかぎりでは、日本のユダヤ政策は両義的であつたかもしれない。しかし、日本が相対的にみてユダヤ人にたいして罪を負うことが少なかつたのは歴史的事実である。このことを明らかにするだけでなく、それを通じて当時の日本の外交・軍事政策をより詳細に分析することに貢献し、さらに、伝統的な日独関係の歴史学的な解明に資すること、それが、長年にわたり日本と強い絆^{きずな}でむすばれ、この国の人々に感謝の念をいだいてい

る筆者の願いである。

* * *

ヨーロッパから逃れてきたユダヤ人にたいする大日本帝国の政策を対象とした本書は、何年にもわたる研究活動の成果である。この問題に取り組むことができた背景には、この尋常ならざるテーマへの一般的な関心もさることながら、学術的な基盤をふまえた助言や熱心な支援をえられたことが大きい。そのことに深甚な謝意を表したい。

調査の重点は日本をめぐって起きたことにおかれ、そのために日本の資料室や研究機関での長時間にわたる作業が必要であつたが、いたるところで懇切な助言や示唆をうけることができた。

原文を入念に翻訳するという面倒な課題を引きうけてくれたのは黒川剛元大使であり、同氏とは常に円滑な協力関係をたもつことができた。特別の感謝を捧げたい。長年にわたり緊密な関係をたもつてきた元防衛研究所教官郷田豊氏のおかげで貴重な知識をえることができた。同氏にも特段の謝意を表したい。

数知れぬ資料を正しく選択するうえで、外務省外交史料館の白石仁章氏に負うところがきわめて多かつた。軍事に関連した史料の発掘は防衛研究所の庄司潤一郎氏の援助なくしては行えなかつた。両氏の支援にも心から感謝したい。

調査と研究の過程で、暖かい関心をしめし専門的な助言をくださった日本の同僚や友人の数も多い。まず挙げるべきは同志社女子大学の宮澤正典教授と在京イスラエル大使館の滝川義人氏である。防衛研究所の西岡朗氏と茨城大学の保延誠教授からも貴重な御支援をいただいた。

防衛大学校の佐瀬昌盛教授のおかげで手に入りにくい原資料に接することができた。自治省の小室裕一氏、文部省の上村秀樹氏そして萩子芳雄元海将の協力も本書の完成に寄与するところ大であった。これらの諸氏にも衷心からの謝意を述べたい(組織・役職は当時のものをふくむ)。

ハインツ・エーバーハルト・マウル

日本はなぜユダヤ人を迫害しなかったのか ● 目次

日本語版への序文

序章

第一章 反ユダヤの幻影

- シフの功罪 26
- 皇道派と統制派 29
- シオンの賢者の議定書と「ユダヤ専門家」たち 34
- パルトナーとしてのナチス・ドイツ 40
- 二つの理論 42
- 日本の疑念 47

第二章 ハルビンから上海まで

- 関東軍と樋口の介入 54
- 結節点ハルビン 59
- シモン・カスペ事件 62

ユダヤ政策を求めて	70
外務省の役割	76
回教及猶太問題委員会	80
極東ユダヤ民族大会	85
難民大量流入はじまる	93
目的地上海	97
五相会議の決定	103
あたらしい「故郷」	107
「専門家」たちの退場	119
入国制限	123

第三章 通過国日本

命を救った外交官 杉原副領事	132
情報収集の命をうけて	135
カウナス領事館	139
通常ならざる出会い	141
プラハとケーニヒスベルク	152
日本のユダヤ人	155
神戸のユダヤ・コミュニティ	156
輸送の難題	159

難民の数	160
移住の準備	162
外務省の対応	164
神戸の最後のユダヤ人	165
上海への移送	168

第四章 極東のゲシユタポと「ゲットー」

「粗暴の輩」マイジンガー	174
上海ミツシヨン	179
日米開戦	181
緊急会議	185
上海の特別措置	190
「上海ゲットー」	191
日本のユダヤ政策の改訂	194
ゲットーの実情	196
「ワルシャワの殺し屋」の最期	199

第五章 文献にみる日本のユダヤ政策

日本のユダヤ研究	202
----------	-----

ウル

校。への留学を経て
ナリストとして
ている。

号を取得。
の時代における
取得。
にも堪能。
新隊」がある。

ア大学史学科を
オトリア大使、
(財)日独協会理事。
」「日本論」、

序章

訳者あとがき

第六章 エピローグ

反ユダヤ主義と超国家主義
ユダヤ政策の特徴
ユダヤ政策の現実
215 212
206

229 219

ウル

校。
への留学を経て
トリストとして
ている。

号を取得
の時代における
取得。
にも堪能
「隊」がある。

大学史学科を
トリア大使、
財)日独協会理事。
「日本論」、